アドベントの約束　　ルカ 1:8-17

教会は一年ごとに繰り返される礼拝のカレンダー「教会暦」というものを持っています。テモテ第二 2:8 に「イエス・キリストのことを心に留めていなさい」とあるように、教会暦はイエス・キリストのご生涯をたどるように組み立てられています。つまりいつもキリストのことを思い浮かべるようになっているのです。教会暦はアドベント、つまり今日から始まります。次に異邦人へ救いが拡がったことを示すエピファニー（公現日）３人の博士の場面、そしてレント（受難節）、イースター、聖霊降臨のペンテコステと続き、ペンテコステ以降は、イエス・キリストと聖霊によってあきらかにされた三位一体の神のみわざをあがめて礼拝を持ち、「王なるキリスト主日」ので終わります。

教会暦のどれもが、「待ち望む」ことを教えています。アドベントはクリスマスを待ち望むことですし、今ならそれは再臨の主イエス、再び来たりたもう主イエスを待ち望むということになります。そうすると信仰生活とは神を「待ち望む」生活であるとも言えます。しかし、「待ち望む」というのは、いったいどうすることなのでしょうか。あるいは待ち望んでいる時に私たちは何をしたら良いのでしょうか？それを見てゆきましょう。

まず神を「待ち望む」ことは、神の約束にもとづく確かな希望を持つことです。「待ち望む」というのは、何の根拠もなしに期待したり、夢をふくらませることではありません。アドベントの四本のキャンドルのうち最初のキャンドルのテーマは「希望」です。これはまた「預言のキャンドル」とも呼ばれます。なぜなら、私たちの「希望」は「預言」から、つまり神の言葉から来るからです。ペテロ第二 1:19 に「また私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています。夜が明けて、明けの明星があなたがたの心に昇るまでは、暗い所を照らすともしびとして、それに目を留めているとよいのです。」と書かれている通りです。わたしたちは、何の根拠もなく神の救いを期待しているのではありません。神が「わたしは来て、あなたを救う」と約束してくださった言葉によって、神の救いの到来を待ち望んでいるのです。

人生の中で、一度も失望や落胆を味合わなかった人は誰もいないでしょう。世の中には、わたしたちをがっかりさせるもので満ちています。しかし、神を信じる者がそうした中でも失望しきってしまわないのは、神の約束の言葉を知っているからです。人と約束をしますと将来への目標なり、方向が決まってきます。希望が出てきます。神の約束の言葉は揺るがない確かな希望へ私たちを導いてくれます。

聖書は「旧約」と「新約」に分かれていますが、「旧約」の「約」も「新約」の「約」も、「契約」や「約束」の「約」です。聖書全体が、神のわたしたちに対する約束の言葉なのですが、それは同時に、具体的な約束の言葉で満ちています。幾つかあげておきましょう。

「見よ。わたしはあなたとともにいて、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。」（創世記 28:15）

「苦難の日にわたしを呼び求めよ。わたしはあなたを助け出しあなたはわたしをあがめる。」（詩篇 50:15）

「神を愛する人たち、すなわち、神のご計画にしたがって召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となることを、私たちは知っています。」（ローマ 8:28）

「あなたがたのうちに、知恵に欠けている人がいるなら、その人は、だれにでも惜しみなく、とがめることなく与えてくださる神に求めなさい。そうすれば与えられます。」（ヤコブ 1:5）

同じような約束がたくさんあります。皆さんはどれほど多くの約束の言葉を知り、それを自分のものとし、信じて行動しているでしょうか。

神の言葉は神の約束です。この御言葉こそが、わたしたちに希望を与えます。御言葉にもとづいた希望は決して失望に終わらないからです。

次に「神を待ち望む」とは忍耐を働かせることです。聖書では「希望」と「忍耐」はいつもワンセットで出てきます。ローマ 8:25 に「私たちはまだ見ていないものを望んでいるのですから、忍耐して待ち望みます。」とあります。また、ローマ 15:4 には、「かつて書かれたものはすべて、私たちを教えるために書

かれました。それは、聖書が与える忍耐と励ましによって、私たちが希望を持ち続けるためです」とあります。テサロニケ第一 1:3 には「望みに支えられた忍耐」という言葉があります。本物の希望は忍耐を生み出し、また忍耐に支えられ、忍耐ののちに、希望が実現すると、聖書は教えています。

「忍耐」というものは、ほとんどの場合、自分から進んでするというよりは、身のまわりに起こる出来事や状況によって、やむなくするもの、せざるを得ないものです。それで、わたしたちは、苦しい状況に追い込まれたとき、「なぜ物事がうまくいかないのだろう」「なぜこんな障害が起こったのだろう」と悩みます。また、こんな惨めでぶざまな状態を人に見せたくない、出来るなら問題を次々と乗り越えてゆく自分でありたいと思います。しかし神を信じる者、その救いを「待ち望む」人は、そのようなときに悔い改め、身を低くしてへりくだり、忍耐します。しかし、それは、決して絶望に押しつぶされているのではありません。やがてそこから立ち上がるために、神への信頼を新しくし、それによって神からの力を蓄えている時なのです。忍耐して待ち望む者にはそこから立ち上がり、前進していく力が与えられるのです。「しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように、翼を広げて上ることができる。走っても力衰えず、歩いても疲れない。」（イザヤ 40:31）とある通りです。

最後に「待ち望む」とは神の救いのために「準備をする」ことです。「待ち望む」というのは、ただぼんやりと時を待つということではありません。もし、みなさんが、大切なお客さんを家に迎えるとしたら、どうするでしょうか。部屋を片付け、掃除をし、食事を作って待つと思います。同じように、キリストの救いを「待ち望む」者、問題の解決を願う人は、神が問題を解決するのに障害となっているものを取り除け、神の救いを受け入れる準備をするはずです。

人が神の救いに備えるまえに、じつは、神は救い主到来の準備をされ、その使命をバプテスマのヨハネにお与えになりました。バプテスマのヨハネは救い主の先駆けとなり、人々が救い主を受け入れる準備をしました。どの福音書も、イエス・キリストの公生涯を描く前に、バプテスマのヨハネが荒野で宣教をはじめたことを書いています。ルカの福音書では、荒野の宣教の三十年前のこと、バプテスマのヨハネの誕生ことを書いています。誕生以前のヨハネにまつわる預言さえもしるされています。ルカ 1:16-17 に「（彼は）イスラエルの子らの多くを、彼らの神である主に立ち返らせます。彼はエリヤの霊と力で、主に先立って歩みます。父たちの心を子どもたちに向けさせ、不従順な者たちを義人の思いに立ち返らせて、主のために、整えられた民を用意します。」とある通りです。この預言の通り、バプテスマのヨハネには、キリストの到来の先駆けとなり、その道備えをするという使命が与えられました。

じつは、バプテスマのヨハネに与えられたのと同じ使命が、今日のクリスチャンひとりひとりにも与えられているのです。救い主として世に来られ、天にお帰りになったイエス・キリストは、王として、もう一度世に来られます。神は、最初の到来のとき、バプテスマのヨハネにその道備えをさせましたが、二度目に来られるときには、クリスチャンにその道備えをさせるのです。

人の救いは神のみがなされるみわざです。しかし人の心が自分の罪とキリストの十字架の赦しへと向けられてゆくためには信仰者の生きざま、証しが必要です。新約聖書の使徒の働きと手紙には初代のクリスチャンがキリストの十字架と復活だけでなく、再臨についても力強く語ったことが書かれています。そればかりでなく、そのクリスチャンの証しは、それを聞いたまわりの人々によって言い広められていたとも書かれています。クリスチャンが自分たちの信じていることを語るだけでなく、それを聞いた人が別の人々に語ると言う、そんな力づよい証しがそこにはあったのです。わたしたちも、言葉とともに、その生き方をもってキリストを証しする者になりたいと思います。人は私たちの成功物語を聞きたいのではなく、困難と失敗の中をいかに神に助けられて力強く歩んだかを知りたいのです。

「アドベント」はキリストの最初の到来を覚えるとともに、キリストの再臨を待ち望むときでもあります。この期間、わたしたちは、キリストの希望をもって迎えられるように、自らを整えたいと思います。そして、キリストの救いを証しし、キリストの二度目の到来への道備えをしたいと思います。

わたしたちは、家族や友人、身近な人たちの救いのために祈り、キリストがそうした人々に、恵みをもって訪れてくださるよう願っています。そうした人々がキリストを受け入れることができるよう、ふだんから福音を伝え、キリストを証ししていきたいと思います。そして、再び来ようとしておられるキリストの先駆け、道備えとなる務めを果たしたいと思います。（祈ります）